「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所　〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18　FAX0282-22-3757
電話連絡先 0282-22-7079(増田)
Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp　ＨＰ：太平山麓九条の会で検索

１７２号
２０２１年１０月２２日発行

１７１号の寄稿 梅村貞子さんの「わたしの戦中・戦後、そして今 思うこと」を読んで 若者の感想！①

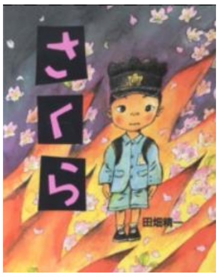
平成 14 年に生まれた私は、実際戦争を体験した人の話をこうして読むのは初めてのことです。私が戦争を知るきっかけになったのは、「火垂るの墓」という映画でした。食べる物も薬もなく、弱っていく妹が兄の腕の中でなくなる。残酷な場面は涙が止まりませんでした。

戦争と聞いても想像できませんでしたが、この紙面を読んで、本当に残酷で悲惨なことだったと伝わりました。小学校から戦争をする国の教育を受けて、お国のために死ぬのはあたりまえ。それに反すれば家族さえも非国民と呼ばれる、とても悲しい日本だったと思います。戦争は広島や長崎の原爆のイメージが強いですが、日本各地に栃木市にも空襲があったと知り、空から爆弾が落ちてきて、家族が目の前で命を奪われると思っただけで、私は耐えられないです。大切な多くの人の命を犠牲にして負けて、何のため、誰のための戦争だったのでしょうか。

敗戦が日本を変え、新憲法が公布されて、今の平和な日本があります。戦争放棄を掲げた九条は、犠牲になった多くの人々の願いが込められていると思います。この九条が変えられ、戦争する国に逆戻りすることは絶対に嫌です。祖母や母が「戦争反対、九条守れ！」と言っていた意味が今、わかった気がします。これからの未来のために、憲法九条は絶対守らないといけない。そのためには戦争を知らない世代が、もっと戦争について学び、自分の子どもや孫に戦争は絶体ダメと伝えます。Ｙ・Ｃ（１９歳）記

「日本・中国・韓国」共同で出された絵本

戦争なんか大きらいな子どもを、日本・中国・韓国で



「作　田端精一」

「へいわってどんなこと?」と問いかける絵本がある。作者浜田桂子さんの下書きは「せんそうするひこうきがとんでこない」「ばくだんがおちてこない」…だった。韓国の作家、編集者から厳しく指摘された。「日本人は『原爆を投下されたり空襲されたくない』と受け身で考える。自分たちが加害者だったと『二度と傷つけない』という考え方が希薄ですね」。戦後生まれの浜田さんは「批判され、議論して私の感覚は広まった」という。「せんそうをしない」「ばくだんをおとさない」…と、子どもの主体性を尊重して能動的な表現に改めた。これは日本の絵本作家が中国、韓国の絵本作家に呼び掛けてつくった「日・中・韓平和絵本」の一冊で協力した童心社から出版されている。各国4人の作家が一冊ずつ、十二冊が三か国語で出版された。

その中の一冊「さくら」は田畑精一さんの作品。田畑さんは一九三一年生まれ、先月、たよりに書いてくださった「軍国少女」だった梅村貞子さんや「軍国少年」だった私と同じ。田畑さんの自伝絵本で「さいた花なら　ちるのはかくご　みごとちりましょ　くにのため」僕らが歌った軍歌まで登場する。三一年（昭和六年）生まれの男の子は「二十歳になったら戦争に行って死ぬ」と、みんな思いこんでいたのじゃないだろうか。

中国・韓国の作家に呼びかけた日本の四人は田畑精一・田島征三、浜田桂子、和歌山静子。話し合いで韓国に行ったとき、田畑さんは「戦争なんか大きらいな子どもを育てよう。そんな子どもを育てることができたら、この国の方たちへのいくらかのおわびになるのではないかと思った」と挨拶した。その言葉がお互いに信頼を高め歴史的な出版を実現させたのだと思う。田畑さんは昨年八九歳で亡くなり、いわむらかずおさんが実行委員長で「ありがとう　絵本作家田畑精一の歩いた道」展が東京で行われ、同名の追悼集が出版されている。

郡司俊雄記

若者の感想 ②

私は戦時中には生まれていないので、その悲惨さを当時の人よりも理解することは決してできません。

しかし、戦争が残酷であるということを、その残酷さが少しも薄れることなく後世に伝えるためには、より多くの人が、戦争中のできごとを知り、より多くの人が語り、伝えていくことが大切だと感じました。そして私は、戦争に限らず、現在のコロナのように、いつ人を脅かすできごとが起こったとしても自分のも家族を守れるように知識を、そして力をつけようと思いました。Ｓ・Ｙ（１８歳　学生)

関口宏の「大人の為のもう一度近現代史」を視聴して

長嶋康子

前号で「戦争に関するテレビ番組を視聴して」を寄稿しましたが、その時少し触れたのが上記の番組です。戦争が終わった日までのことで、自分が勉強してわかったこととその感想を述べたいと思います。

１９４５年2月、チャーチル・ルーズベルト・スターリンが出席したヤルタ会談で、スターリンはヨーロッパ戦線終結３か月後に対日戦に参戦すると表明。北方四島をソ連領とする約束を取り付けたが、それは秘密協定とされた。この事実に私は、終戦後を見通して領土拡張を持ち出すことに驚きます。

6月２３日には沖縄での戦闘が終わる。今まで何度も放映された沖縄戦の、恐怖で震えの止まらぬ幼女、敵兵に?つかまるまいとして断崖から海に身を投げる女性の酷さを思い起こす。

7月にはアメリカが原子爆弾の実験に成功。開発費用は1兆4千億円。トルーマンはその投下を命令した。対日政策にソ連を関わらせたくなかったので、ソ連参戦前に日本を降伏させたかったための原爆投下だという。米ソ冷戦の芽が見える。

7月２８日に連合国は日本にポツダム宣言を出す。鈴木貫太郎首相は軍の意を思い黙殺の態度をとったが、誤訳もあり「拒否する」と伝わってしまった。

8月６日に広島に原爆を投下される。その時の死者は１４万人。７６年後の２０２１年には関連死者が３２万人にもなっている。損得の為には道を選ばぬ、人道に反する行為だと思う。

8月９日にソ連参戦。１７万人の兵力で満州帝国に侵攻。当時満州には日本人の兵隊と民間人が１５５万人居たがその内５７万５千人がシベリアに抑留され、劣悪な環境下で５万８千人が命を落とした。帰還を望みながら叶わず、冷たい土に倒れた人を思うと辛い。

8月９日には長崎にも原爆が投下される。同日に最高戦争指導者会議である御前会議が持たれたが、文官と武官の意見の違いは大きく軍人は一億玉砕、本土決戦を叫んで泣く者もいた。

8月１０日に、天皇は東郷外相など文官側の意見に賛成し統帥権側（武官側）の意見に反対すると意志を表明し、ポツダム宣言受諾が決まった。反対派の中堅将校等はクーデターを画策するが、阿南陸軍大臣が、聖断に従うべしとして許さない。天皇は、内々戦争続行に反対であり首相には心底を吐露していたようだが、そうとすれば決断が遅すぎたと私は思う。

8月１４日に天皇は会議を招集して全面降伏を正式に発表する。全国民に自身の声で伝えるとして終戦の辞を録音するが、尚反対の兵達が録音盤を奪おうと皇居内を探すが皇后側の小ぶりな金庫に入れてあったので無事。8月１４日の夜、阿南陸相は割腹自殺を遂げる。

１５日のラジオからの天皇の終戦宣言で、聞き取りにくくはあれ戦争が終わった事を私達は知った。小学校２年だった私は電灯の黒幕が外され、空襲が無くなった事に解き放たれたものを感じた。

スタンディング　１１月９日（火）市役所前　１１月１９日（金）ケーズデンキ前交差点　**午後３時～**

※時間は、１１月～３月まで午後３時からになります。

＊スタッフ会議　１１月１１日（木）・２６日（金）楽習館（旧第一小学校）2階　１３時３０分～